

加えて、近年では、鉢花用としての需要もあり、鉢生産も行われている。環境制御が可能な施設を併設し、開花調節技術を活用して、開花時期の早晩化を図ることも品種によっては可能である。そのためには、種苗としての苗生産時期の周年化または可能な限りの周年化が必要となる。そこで、挿し木時期と発根状況から挿し木適期を求めた。品種間での適期の違いや発根量の多寡があり、出荷体系に併せて生産工程を組むことができ、効率的な生産を試みることができる。

栽培現場では、疲弊した状況が続い

ているが、販売促進や作業性の向上を図る努力を続けている。その一面を担うためには、薬剤の新規登録・適用拡大が必要不可欠である。殺虫剤・殺菌剤だけでなく、除草剤や植物生育調節剤においても、新規薬剤開発や適用拡大により作業性の向上が大いに期待できる。

品種改良は、交配・採種から発芽後の生育・開花までに数年を要することから、経年的に進められている。従来型の交配育種や、DNA マーカーを利用した育種法の開発、重イオンビームなどを利用した突然変異育種法の開発

がなされており、今後の発展性は高いと考えられる。

謝辞

本稿執筆の機会を賜りました方々、本稿作成に当たりご指導を賜りました方々に謝意を表します。また、研究活動に対してご協力賜りました方々に謝意を表します。

参考文献

三重県 2005. サツキ伊勢シリーズ栽培体系。農林水産省 2014. 平成24年度生産状況調査。千田ら、未発表。



春紫苑・紫苑
姫紫苑・姫女苑

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

春、道端や田んぼの畦などで、背の高さ1mを超え、直径2cmほどの白っぽい花をたくさんつけているキク科の二年生草本がある。この草本、日本に持ち込まれた当初は「柳葉姫菊」と呼ばれ、その名の通り、柳のような姿を「女」の「苑」で振りまいていたのかも知れない。春の終りとともに、この「姫」君はその数を減らす、そのときには綿毛となって「女」の「苑」をずいぶん広げている。開花のピークは夏の始まりころまでであるが、まだまだ、夏の終わりまで花を咲かせる。それどころか、場所によっては一年中花を咲かせている。

もう少し早い「春」の時期に、背丈は1mに足りないくらいで、直径2cmほどの白色ないしは淡い紅「紫」色の花を、その「苑」でつけているキク科の多年生草本もある。どちらも帰化種で、似たような環境で繁茂する。前者の方が先輩で江戸時代末期には観賞用として導入されていたようである。後者は大正時代から。戦後、全国に広がった。

表題には両者の間に「紫苑」と「姫紫苑」がある。これらの4種が、分類学的に近縁種であるというわけでは「全く」ない。漢字を1字ずつ加除してこの4種を並べてみたまでのことである。分類学的にはいずれもキク科で、中の2種がAster属、外の2種がErigeron属である。中の2種の花は秋に咲くが、外の2種は春から夏に咲く。

「紫苑」は、「しおに」とか「鬼の醜草(しこぐさ)」とか呼ばれ、万葉集に古今和歌集、源氏物語に枕草子など昔から様々な場面で取り上げられてきた。現代では、「紫苑」の前に「春」や「姫」が付き、ましてや「女」も増えた。さだまさしも「春女苑」と歌う。さだまさしの歌にも出てくるように、「春紫苑」はうす紅色でうつむくが、それは「春紫苑」であり、さだまさしの言う「春女苑」ではない。

表題は、ハルジオン、シオン、ヒメシオン、ヒメジョオンと読む。ハルジオンはない。「女」の「苑」に「春」はないのである。